

授 業 科 目 名	必修・ 選択別	単位数	対象 学年	学 期	曜・限	主に使用 する言語	その他に使用 する言語	担当形態
臨床薬理学 I	必修	1	2	3		日本語		オムニバス

【担当教員】 上村尚人・甲斐恵・濡木真一・和久田浩一・中村優佑・関口愛

【科目名の英文】 Clinical Pharmacology and Therapeutics I

【授業の概要・到達目標】

臨床薬理学では、薬理学の知識を用い、薬物の人体における作用と動態を学習し、実際の臨床の現場での合理的薬物治療について学習する。また、基礎研究から臨床研究への橋渡しの研究となる「創薬」について紹介する。

具 体 的 な 到 達 目 標	医学科ディプロマポリシーとの対応					
	1	2	3	4	5	6
1. 薬の定義を説明でき、薬の名前を正しく使うことができる。	○					
2. 薬物動態を理解し、代謝酵素やトランスポーターについて説明できる。	○					
3. 高齢者の薬物動態について若年者との違いを説明できる。	○					
4. 薬の作用メカニズムを正しく説明できる。	○					
5. 薬物相互作用について説明できる。	○					
6. 薬物有害反応について説明できる。	○					
7. 創薬について概説できる。	○				○	
8. 治療における薬物治療の位置づけを概説できる。	○					
9. 薬理動態・薬物作用の個体差および人種差について説明できる。	○					
10. 薬物治療における患者との信頼関係の構築の必要性について説明できる。	○	○				
各 DP への関連度 (計 10)	8	1			1	

【授業の内容】

回数	授業項目	授業内容	担当講座・教員	方法
1	臨床薬理の基礎 1	臨床薬理の概念	臨床薬理・上村	講義
2	臨床薬理の基礎 2	薬のたどる道	臨床薬理・甲斐	講義
3	臨床薬理の基礎 3	CYP とトランスポーター	臨床薬理・大谷 (特任)	講義
4	臨床薬理の基礎 4	年齢と薬物代謝	臨床薬理・中村	講義
5	臨床薬理の基礎 5	薬の作用メカニズム	臨床薬理・甲斐	講義
6	臨床薬理の基礎 6	薬と薬の相互作用	臨床薬理・和久田	講義
7	臨床薬理の基礎 7	薬物有害反応	臨床薬理・中村	講義
8, 9	臨床薬理の基礎 8	薬の開発	臨床薬理・上村	講義
10	臨床薬理の基礎 9	臨床薬理 I まとめ	臨床薬理・上村	講義
11	臨床薬理学の応用	薬物治療のみでは治療が困難な疾患 (心身症) の治療	臨床薬理・関口	講義
12	特別講義	薬物治療効果の構造的理解	臨床薬理・中野 (非)	講義
13	特別講義	線維筋痛症と診断された慢性疼痛患者との対話から学ぶ治療学 (医療コミュニケーション)	臨床薬理・中野 (非)	講義
14, 15	特別講義	妊娠と薬	福岡みらい病院・松木	講義
16	特別講義	薬物動態論の基礎とその応用である投与設計と TDM	静岡県立大学・内田	講義
17	特別講義	薬物動態の変動要因の一つである相互作用、薬物動態に治療に適した特性を持たせるための製剤	静岡県立大学・内田	講義
18, 19	特別講義	早期臨床試験	北里大学・蓮沼	講義
20, 21	特別講義	医療統計学	久留米大学・大山	講義

22, 23	特別講義	PK-PD 概論とモデリング	MSD 株式会社・吉次	講義
24	Translational chemical biology 1	Translational chemical biology	臨床薬理・松岡	講義
25	Translational chemical biology 2	Translational chemical biology	臨床薬理・土川	講義

【アクティブラーニングの内容】 臨床薬理の基礎を学んだ上で特別講義を聴講し、実臨床からみた臨床薬理の実際を「対話的な学び」を通して考えを発展させる。また現在進行系の創薬に関して可能な限り紹介する。	【その他の工夫】 非常勤講師の講義を増やし多角的な視点で臨床薬理を学ぶように設定した。
--	---

【時間外学修の内容と時間の目安】

準備学修	Moodle にアップロードしている資料に目を通し、講義内容について予習しておく（6h）。
事後学修	講義内容について、ノートおよび講義資料を参考にして復習する。重要な用語については、他者に説明できるようになるまで学習する（18h）。
想定時間合計	24h

【教科書】
教科書は指定しない。
Moodle にアップロードする講義資料を使用する。

【参考書】
臨床薬理学 第4版（日本臨床薬理学会）医学書院 2017年 ISBN 978-4-260-02873-8
患者さんと医療系学生のための臨床薬理学入門 単行本（笹栗俊之）九州大学出版会 2016年 ISBN 978-4-798-50186-4

【成績評価方法及び評価の割合】
上記のすべての「具体的な到達目標」について、本試験またはレポートで評価する。なお、本試験（90%）およびレポート（10%）の合計得点が6割を超えたものを合格とする。ただし、出席回数が3分の2に満たない場合は、本試験の受験を認めない。

【注意事項】

【備考】

リンク		
	URL	

教員の実務経験の有無	○	
教員の実務経験	上村尚人（医師）・甲斐恵（医師）・濡木真一（医師）・和久田浩一（薬剤師）・中村優佑（医師）・関口愛（臨床心理士）	
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無	○	
教員以外の指導に関わる実務経験者	医師、薬剤師、メーカーの開発部門	
実務経験をいかした教育内容	医師、薬剤師、臨床心理士、メーカーの開発部門担当者が、それぞれの専門分野から薬や治療について講義を行う。よって学生は多角的な視点から薬や治療について学ぶことができる。	
授業形態	対面授業、一部 Zoom（中野先生）	